

【4】図書館のサロン化

我家の近くに区立図書館があり、便利なので調べ物があるときなど利用しています。

一般の図書館には珍しく重厚な書籍や理工系の教科書的な本も多くあり、読書机も多数用意されていて中高生や受験生が利用していました。

満席のことが多く、熱心に勉強しているのを眺めるのは快感でした。

図書館の入り口に廃棄本の棚があり、古雑誌、古い時刻表、汚れた書籍などが自由に持って行けと置いてあります。ところが、ある時から新しそうな本や辞典、古典的な読み物、理工系の本などが並べられて、もったいなく思った私は有難く頂戴して何冊か持ち帰りました。

そのころから部屋の模様替えが始まり、完成した姿を見て違和感を覚えました。

図書館の大ゲサに言えば、落ち着いた重々しい雰囲気が失われたのです。

読書机は半減され、代わりに背もたれのあるソファ風長の椅子が並べられ、駅の待合室のようになってしまいました。

窓際に沿って雑誌用の書架が増設され、並べられている雑誌類も大巾に増えました。文芸春秋、アエラ、週刊新潮なんて古典派は少数派で、女性のファッション雑誌が多数を占めています。それにしても女性誌がこんなにも横文字の名前が多いとは知りませんでした。

VOGUE は有名ですが、UOMO, eclat, ESSE, Oggi, GLOW, CUT…となると私は全く知りません。料理、育児、医療、登山、鉄道、自動車などあらゆる分野の雑誌があり、ざっと 200 種はあります。書棚の蔵書は本格的な本は減り、理工系に到っては半減のあり様、代わりに増えたのが現代の小説類です。単行本も増えましたが、大幅に増えたのが文庫本、新書版で、のべにして数千冊はありそうです。しつこく数えたら、人気作家の佐伯泰英の文庫本が 250 冊、西村京太郎が 120 冊もありました。同じ本が何冊もあります。ハーレクイン・ロマンスという女性向きのシリーズは計 500 冊もありました。ウーンと考え込んでしまいました。

区も金をかけて図書館を改造したのだから目的はあるのでしょうか。区民に、買い物帰りや勤務時間後にあるいは昼休みに気楽に立ち寄ってもらって、雑誌でもパラパラめくってリラックスして下さいということなののでしょうか。

調べ物はスマホに任せ、勉強する若者は他所へ行って下さいということなののでしょうか？これじゃあ図書館ではなくサロンではないですか。

少々飛躍しますが、20 年後の日本が心配になってきたという一幕です。